1 ▭ # キリスト教神学

第4章　神学と聖書の批評的研究

一宮基督教研究所
安黒務

2 ▭ 「キリスト教神学」

概略

1 ▭

1. 神を研究すること
2. 神を知ること
3. 神はどのような方か
4. 神は何をなされるか
5. 人間
6. 罪

2 ▭

7. キリストの人格
8. キリストのみわざ
9. 聖霊
10. 救い
11. 教会
12. 終末

3 ▭ ## 第1部　神を研究すること

概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

4 ▭ ## 序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

5 ▭ ## 第4章　神学と聖書の批評的研究

概略

- 序論
1. 様式史批評
    1. 背景
    2. 原理
    3. 様式史批評の評価
    4. 様式史批評への批判
2. 編集史批評
    1. 研究の展開と特質
    2. 編集史批評への批判
    3. 編集史批評の評価
3. 構造批評
4. 読み手応答批評
5. 批評学的方法を評価するためのガイドライン

6

序論

1. プレモダンからモダンへの移行期：批評学的方法
2. 歴史編纂－歴史的批評
3. 聖書の各巻に適用－モーセ五書「文書資料説」
    1. J，E，D，Pの異なった文書資料
    2. モーセ時代以降に構成
    3. 歴史的説明に不正確さ
    4. 後代に属する部分と初期に属する部分
4. 聖書全体をふるいにかけて真偽の判断の必要
    1. 本文批評 (textual criticism)
    2. 文献批評 (literary-source criticism)
    3. 様式史批評 (form criticism)
    4. 編集史批評 (redaction criticism)
    5. 歴史的批評 (historical criticism)
    6. 比較宗教批評 (comparative-religions criticism)
    7. 構造批評 (structural criticism)
    8. 読み手応答批評 (reader-response criticism)
5. 聖書の内容と歴史的現実の関係に関する問い
6. 批評学における方法論－選択的に検討

7

第1節　様式史批評

①背景

1. 一番最初に記されたのがマルコ
2. 文書の背後に口伝の伝承 (oral traditions)

8

第1節　様式史批評

②原理

1. イエスの物語と言葉
2. 自己完結的資料群－文学様式により分類
3. 分類後、階層ごとに分けられる
    1. 口伝のたどる一般的な過程や道筋
    2. 大学新聞の四コマ漫画
    3. 福音書資料についての幾つかの結論
4. 初代教会における「生活の座」の確定
    1. ルドルフ・ブルトマン
    2. 「史的イエスの新しい探求」

9

第1節　様式史批評

③様式史批評の評価

- 様式史批評の果たした肯定的な貢献
1. イエスの行為・言葉と付き従う信仰者の不可分性の指摘
    - 信仰に重要でないものは描き出さず
2. 福音書は信仰者の”集団”により作成されたとの指摘
3. 組み込まれた資料、選択、直面していた状況からの学びの指摘
4. 諸前提が聖書記者の視点に反しない場合、確証する助けとなる

10

第1節　様式史批評

④様式史批評への批判

- 様式史批評の前提・適用…多くの問題
1. 「記者は歴史にさほどの関心なし」との前提
    1. 歴史において働かれる神の世界
    2. 目撃者の数が減り始めていた
2. 「記者は信頼性に欠ける人物」との仮定
    1. 真実性に高い価値を置く人々・記憶力の強靭さ
    2. 「反復における復元」「記憶の連鎖」
3. 様式を階層化する試み－失敗に終わる傾向
    - 幾つかの前提－さらに検討を要する
4. 伝承の組込・創作－「生活の座」により説明できると仮定
    - 教会に不利な事柄が記述－記者の誠実さ
5. 「独自性」が真正性の基準と仮定
6. 「聖書が霊感されたものである」との可能性なしと仮定
7. 「目撃者が記録した」ことは無視されている

- 様式史批評：資料の歴史性を評価する能力は低い

11 ▭

第2節　編集史批評
①研究の展開と特質

1. 様式史批評・伝承批評・編集史批評の関係
2. 様式史批評と編集史批評
3. ボルンカム、コンツェルマン、マルクセン
4. ルカ福音書：歴史的関心・著述家の模範
5. 三つの生活の座
    1. イエスが最初に語り、行動した状況
    2. 初代教会が宣教活動において直面した状況
    3. 福音書の働きと目的における状況
6. 枠組み・伝承の様式・記者の立場や視点に焦点
7. 「記者はイエスの言葉・行動に関心もたず」との仮定
8. 個々の資料の非真正ではなく、その真正性
9. より急進的な編集史批評学者たちは…
10. ウィリアム・ウォーカー：編集資料を伝統的資料から区別する段階の一覧表

12 ▭

第2節　編集史批評
②編集史批評への批判

1. 「記者は神学的目的・方法をもつ人々」との仮定
2. 「特定の聴衆・特定の問題を念頭に語られている」との仮定
3. 言語や文体という基準がもつ効力は多様
4. 「編集句からのみ判断される」と仮定
5. 福音書の状況や目的を調べることに限定される

13 ▭

第2節　編集史批評
③編集史批評の評価

1. 真正性の基準がより理にかなうなら
2. 広義と狭義の意味
3. 限定された範囲で使用する
    1. 聖書本文の真実性を実証する助けとなる
    2. 記者の強調した特定の事柄を判断する助けとなる
    3. 共観福音書の問題を解決する助けとなる
4. 受け取った資料のコンテクスチャリゼーションの洞察を得る
5. 記者たちの働きには解釈が含まれる
6. 「彼自身の言葉」ではなく「彼自身の声」
7. アラム語で語られ、ギリシャ語に翻訳された
8. 保守的な理解と懐疑的な理解とを区別する方法

14 ▭

第3節　構造批評

1. 新しい方向転換の兆し
2. 言語学者ソシュールと人類学者レヴィ＝ストロース
3. 文芸評論家マーレー・クリーガー
4. 「聖書神学運動」の崩壊
5. 方法論：根本的に自然主義
6. 共時的・垂直的に見る
7. 釈義学者の方法論的前提：その文化に属する
8. ラング（言語体系）とパロール（発話行為）
    1. 著者の具体的な状況－「発音の構造」
    2. 「文化的構造」「文化的諸規定」による制約
    3. 「深層構造」－著者あるいは話し手に自らを押し付ける制約
9. 深層構造：物語構造と神話的構造
10. 構造主義の短所：アンソニー・シセルトン
    1. 初期、ある程度の客観主義が存在
    2. 結果の有益さ等についての疑問
    3. 思想にあまりにも多くの修正

15 ▭

第4節　読み手応答批評

1. テキストと読者相互間を重視するアプローチ
2. ポストモダンの批評学は：バーネット
3. スタンレー・フィッシュ：最も急進的
4. このアプローチの主観性
5. 客観化が行われる要素

6. フィッシュほど先に進んではいない
7. ファウル：意味についての議論をあきらめる
8. ポーター：方法論の活用に欠陥がある
9. テキストの中に意味を置く→読者の中に位置づける
    1. 意味の問題はすべてのテキストに適用される
    2. 言語に対する規定的なアプローチという誤り
    3. 主観主義につきまとう傾向は解決されず
    4. 物語哲学以上ものではない

16

第5節　批評学的方法を評価するためのガイドライン

1. 反超自然的な意味をもつ前提に警戒
2. 循環論法の存在を見つける必要
3. 根拠のない推測に対する警戒
4. 恣意性や主観性に気づく必要
5. 信仰と理性は対照的関係という前提に警戒
6. 確実性より蓋然性である

- 聖書批評学はその成果において否定的である必要はない
- 聖書の十全な権威と一致した前提を基盤とするなら、聖書の意味の上にさらなる光をもたらす有用な手段となりうる